

## 特集2

### 困窮する若者と住まい—政策形成に市民はどう参加できるのか—

開催日：2022年10月25日

登壇者：荒井佑介（NPO 法人サンカクシャ代表理事）

小田川華子（公益社団法人ユニバーサル志縁センター事務局長、グローバル・コンサーン研究所客員所員）

濱田江里子（立教大学コミュニティ福祉学部准教授、グローバル・コンサーン研究所準所員）

濱田：

トークイベント「困窮する若者と住まい—政策形成に市民はどう参加できるのか—」を始めていきたいと思います。私は上智大学グローバル・コンサーン研究所の準所員で、立教大学のコミュニティ福祉学部に勤めている濱田江里子と申します。今日は私と、NPO 法人サンカクシャの代表理事をされている荒井さんと、公益社団法人ユニバーサル志縁センターの事務局長とグローバル・コンサーン研究所の客員所員もしている小田川さんにお話いただきます。硬い感じではなく、お互いに忌憚のない意見を交換しながら進めていけたらと思います。

本日の進行は第一部で30分ほど、お互いに困窮する若者と住まいの問題にどのような問題関心を持っているのか、どういう活動しているのかということをご自己紹介がてらお話ししたいと思います。その後はそれぞれ15分ずつ、若者の住まいと困窮の問題に関してそれぞれの専門の視点からお話をします。初めに、私からは日本の住宅保障の課題とか、海外の制度と比較してどういうところに特徴や課題があるのかという話をします。その後には日本の課題を埋める取り組みとして、実際にどんなことがなされているのかについて、若者支援に日々取り組んでいて、今日も多分その現場から直接いらして下さったんじゃないかと思われる、荒井さんから具体的な活動のご紹介も含めて発表していただきます。苦労話なんかも聞けるのではないのでしょうか。最後に、小田川さんからは、今お勤めのユニバーサル志縁センターという中間支援団体、中間支援組織というのは一体どういうふうには若者の住まいとか困窮の問題に関わっているのかというのをお話いただき、現場支援から政策提言はどのようにされているのかというお話をさせていただきます。その後、30分ほどはそれぞれの話を受けて、ディスカッションをしたいと思います。今日のメインはサブタイトルにありまして、政策形成に市民はどう参加できるのか、私達一人ひとりはどうやって参加できるのかを、会場の皆さんとオンラインでご参加の皆さんと一緒に考えたいと思っています。最後に少し質疑応答の時間も取りたいと思っています。そのように2時

間進めていきたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

それでは、最初に少し自己紹介も兼ねて、それぞれご用意いただいたスライドがありますので、それに沿ってお話いただくというような形でよろしいでしょうか。最初は一問一答みたいな感じで、それぞれからどんな形でこの若者の住まいとか、貧困の問題と出会ったのかとか、今どんな活動をしているのかとか、活動を通じて気付いたことなどをシェアしていけたらと思っています。まず小田川さんからお聞きしてもよろしいでしょうか。どうでしょう、小田川さんは若者の住まいとか、困窮の問題とはどういう形で出会ったのでしょうか。

**小田川：**

そうですね、私の場合はまず、住宅そのものに困窮するという事態が起こってるなという事に気づいたのが、90年代の後半だったんですね。その頃、私は京都の大学に行っていたんですね。毎日、大学に行くのに鴨川の橋を渡るんですけども、橋の下に住んでらっしゃる人が結構たくさんいました、その頃は。それで、どうしてそこに住むことになったんだろうかということすごく思うようになったんですね。私は福祉の勉強をしていたんですけども、いろいろ支援制度があるのに、なぜここに住まなければいけないことになるんだろうかというふうに思ったわけです。

また、周囲の人は、橋の下に住む人っていうのは危ないよとか、近寄ってはいけないとか言うわけですけども、本当にそうなんだろうか、事情をよく聞いてみないとわからないことですし、実際に会ってみたいなっていうふうに思ったんですね。それで京都には「夜回りの会」というボランティアグループがありまして、夜、野宿してる方々を訪ねていく活動をしていました。大体夜9時ぐらいに駅前に集合して、駅周辺、公園に寝てる方を訪ねていくんですけども。そこに参加をして、駅の周辺に寝起きしてるおじさんたちといろいろお話をして、本当にいろんな事情があるんだな、見えないところですごく苦労されている、それでここに至っているんだなってことが、わかってきたんですね。そこから抜け出したい、でも難しいっていう問題をずっと伺っていました。直接出会ったのは割とお年を召した方が多かったんですけども、よく周りを見てみたら、マクドナルドに若者いるよねと。深夜までいるし、朝まで開いているマクドに、ずっとあの子達いるんじゃないっていうことが、見えてきたんですね。それで、若者も住宅を失うってことになってるんじゃないだろうかと気づいたのが90年代後半だったということです。

**濱田：**

ありがとうございます。90年代、そうするともう30年ぐらい、この問題に関わってこられたということですね。野宿者が入り口だったということですが、その辺は荒井さんの活動のきっかけとも重なるような気がするんですがどうでしょう。

**荒井：**

私は、2008年頃に、新宿で路上生活者のサポートやってる団体とかに、ボランティアに行ったり、インターンに行ったりっていう活動が一番最初で、当時まだ大学1年生だったので、18歳、今32歳。以来、2008年からずっと活動してる感じです。もうちょっとだけ喋ると、私2008年のときにホームレス支援に携わって、結構その頃、若者ホームレスがたくさんいて、同世代の方がいて、なんでこんな若くして路上に出るんだろうってことに純粋に疑問を持ったのが大学時代ですね。その後に「子どもの貧困」という言葉がちょうど言われ始めて、地元埼玉なんですけど、埼玉の方で「子どもの貧困」、学習支援の取り組みが行われるというので、そこに面白半分ボランティアに参加したら、のめりこんでしまっ。小学生の勉強、中学生の勉強、で中学生の勉強を見てた子が高校進学して、高校進学した後がすごい大変で。みんな妊娠出産して、高校中退して、それこそ家出する子とかもたくさんいて、っていうのを見てきて、子ども全体の支援をしたいなというので、サンカクシャを立ち上げたというのがざっくりとしたここまでの経緯です。

**濱田：**

ありがとうございます。初めに私は荒井さんに質問があっ。このサンカクシャっていう名前が非常にユニークだなと思って、カタカナでサンカクシャとされたのは、何かここに込められた想いみたいなものがあるのかをお聞きしたいなと思います。

**荒井：**

忘れもしないですけど、2019年3月17日がNPO法人の設立総会だったんですよ。書類全部できたんですけど、唯一名前だけ決まなくて。私、本当に名前考えるのが苦手で、どうしようって言って、理事の人たちみんな集めて、一発目の会議で名前決めるってなっ。最初ローマ字かなって思ってたんですけど、理事の人は社会参画っていうのが多分キーワードなんじゃないかと。それをもじったらいいんじゃないかっていうので、参画者でカタカナにしたら意外と響きがいいんじゃないかってなって、サンカクシャになりました。私が決めたわけじゃありません。

**濱田：**

ありがとうございます。私も社会参画って、今日のキーワードの一つだと思うんですが、やっぱり何か通じるもの込められていたんだなということを確認できて良かったです。

それぞれ、野宿者とか貧困とかの入口があっ若者の住まいの問題にたどり着いたというお話だったんですが、今どんな活動をしているのか、どんな感じで日々活動されてるのか、もう少しお話しいただけたらと思います。小田川さん、いかがでしょうか。

**小田川：**

そうですね。私の場合は、今に至る手前のところの話をもう少しの方がいいかなと思います。京都で、若者がマクドにずっと夜中いるよねっていうのに気づいて以来、ずっと気になっていたんですけれども、その後、「ネットカフェ難民」というのが言われるようになって、そしてリーマンショックで大量の派遣切りが起きました。派遣会社の寮で生活をしていて、比較的若い方々が仕事を失うと同時に住居も失って、もう路上に出ざるを得なくなってしまって、割と若い世代の野宿生活者が増えたのが2008年、2009年頃ですね。その頃に荒井さんが活動を始められたんだってことが今わかりました。私はその頃ちょうど東京に拠点を移した頃でして、大変な時代になったなと思っていたんですね。なんでアパートで暮らすことができないんだろうか、どういうことなのかということで、住宅政策について調べてみたりしていたんです。

2013年に、違法貸しルームというのが問題になりました。これは、市民団体の中で「脱法ハウス」と言われていたシェアハウスです。国が定めた安全基準にのっとらない形で、多くの入居者が本当に狭小に区切られたスペースで生活をする、そういうタイプのシェアハウスなんですね。防火設備もないし、窓がなかったりとかですね。とてもひどい環境でも、そこで何とか暮らしていく比較的若い世代がそこに多いということで、これは根が深いなと思ったんです。そこで私は、調査をしてみたいなと思いまして、市民活動の仲間と一緒に、シェアハウス入居者に聞き取り調査をしたんですよ。そしたら、シェアハウスに入ってる人ってどんな人なのかって言ったら、親に頼ることができなくて、仕事が不安定で低収入、それで所持金が少ないということで、アパートを借りるのがとっても難しいんだということがわかったんですよ。だから、シェアハウスにいるんだということなんですね。

資料1 (小田川作成)

### シェアハウス入居者に聞き取り調査をして分かったこと

親に頼ることができず、  
仕事が不安定、低収入、  
所持金が少ない若者にとって

アパートを借りるのはとても難しい

↓

- 敷居の低いシェアハウスに
- シェアハウスは、貯金がなくても、保証人がいなくても、即日入居できる
- しごとが安定せず、シェアハウスを転々としがち

	アパート	シェアハウス
初期費用	家賃の2.5倍	なしorデポジット
連帯保証人	必要	不要
家賃	日雇い、仕事掛け持ちできる立地は高い	専用スペースが狭い分、安価
家財道具	自前で用意	備え付け
安定性	賃貸借契約	同室・隣室の居住者との関係で退去につながりやすい

漂流する若者たち

3

小田川：

アパートに入っている人とシェアハウスに入っている人をちょっと比較をしてみたんです。アパートに入るって初期費用が要りますよね。アパートを借りたことがある方はおわかりかと思いますが、一番最初に、家賃の2.5倍ぐらいのお金を用意していないとアパートに入れななんですけど、シェアハウスはそういうのは要らないですね。すごく低額のデポジットさえあればどうぞと言ってももらえますし、連帯保証人なんかも、アパートだと絶対にあなたの保証をしてくれる人は誰ですかって聞かれるけど、シェアハウスはそんなことはないですね。家賃も、シェアハウスはとても安いんです。若者たちは、安定的な仕事に就いていないので、日々、今日はここ、明日はあっち、その次の日はどこかわからないみたいなことで、動き回って仕事をするので、いろんな仕事にアクセスの良い場所に住んでなくてはいけないという都合があって、そういう利便性のよい場所でアパートを借りるのは非常にハードルが高いんだということがわかってきました。また、家財道具という面で、アパートはとてもハードルが高いわけです。そういうことで、シェアハウスは貯金がなくても、保証人がいなくても、その日に入れるということで、若者たちの受け皿になっているんだということがわかりました。ところが、やっぱり仕事が安定しないですし、シェアハウスも転々としているんだという姿も、お話を聞く中で浮かび上がってきたんですね。若者たちは漂流しているなということを感じました。今、若者支援の現場の皆さんを後方からサポートする中間支援団体の立場で荒井さんのお話を毎月伺うんですけども、漂流している若者たちをキャッチして下さってるんだなということも感じております。

**濱田：**

今のお話で、小田川さんが荒井さんの活動を支えているという、お二人の関係性がちょっと見えてきましたね。荒井さんは今最前線にいらっしゃると思うんですが、どうでしょう、そういうところで感じる課題とか、壁とか、穴とか、隙間とか、どういうものが見えてきますか。

**荒井：**

そうですね。まさに、資料1に書いてある通りの子たち、今も昔も変わらないんだなっていうのを今すごく感じて。今、変わってきたなって思うところが、結構TwitterとかSNSでこういう情報を探す若者がすごい増えてるっていうのはあって、私達のシェアハウスに繋がった半分ぐらいの子は、後で紹介しますが、私がやってる謎のTwitterから入ってくるんですよ。別にそんなにフォロワーがたくさんいるわけでもないんですけど、そういうTwitterから情報を拾って、キャッチする子がいて。話を聞くと、一応検索はみんなできるので、するんですよ。行政の支援とかが出てきて、なんかやだなって思って、SNSで探す、そうすると民間の怪しい業者にいっぱい繋がるんですけど、その中でもここだったら大丈夫

夫かなっていうので、私たちのところに連絡がきたりする。そういう SNS の普及で、情報がキャッチできるようになったってのはあるんじゃないかなと思いますし、そういう形でキャッチできちゃうので、ある種、若者に手を差し伸べようと思う変な業者もやっぱり SNS 上にはたくさんいるんだなというのがよくわかってきてるんで、そういう変化を感じてたりします。

行政に自分で問い合わせたり、相談窓口、LINE 相談とかも増えていて、自分で問い合わせしてそういうところで相談したりする子はいいんですけど。私達がターゲットにしている子たち、私達のところに来る子たちって、なんかこう、助けてほしい気持ちはあるものの、行政の支援ってなんかやだなって思っていたり、人の助けを借りたくないとか思っていたりする子たちが結構多くて。私、ゲームをめっちゃやっているんで、Twitter のほとんどゲームの話だったんですけど、ゲームやっている兄ちゃんや、一応 NPO で何かやっているらしいぐらいの認識でいられるので、やっぱり、こういうキャラだからこそ繋がれる子たちがいるってのはすごく感じます。公的支援と若者のカルチャーが、やっぱり合わないところって結構大きい課題な気はするので、その溝をどう埋めていくのかというのはすごい考えます。今日もさっきギリギリまで、区の人と喋ってたんですけど、区の人達、皆真面目ないい人たちなんで、もうちょっと真面目じゃない適当な人たちが若者に関わっていくっていう領域を、私達は開拓していきたいと思っています。

#### 濱田：

ありがとうございます。そうですね、私はどちらかといえば行政の仕組みとか、国の政策とか制度がどうなっているのかとか、どうやって作られているのかみたいなことに、元々は関心があって。今お二人は住まいの話がメインで、野宿者支援とかのところから入ってこられたということだったんですが、私はどちらかというと、働く話ですね、仕事の話、就労支援の方から、こういう問題があるんじゃないのかなという関心を持ちました。

若者に限らず、日本の働き方が社会保障とか福祉の制度がつくられた時代とは前提が非常に変わってきている。仕事や働き方が変わってくる中で、家族のあり方も変わってきている。後半のお話でもしますが、仕事と家族っていうのが日本の場合はセーフティネットとして非常に重要な機能を果たしていたけれども、どっちも不安定になっていて、どっちにも頼ることができない人、特に若い人はどうしたらいいのかっていうところがそもそものきっかけです。で、仕事がないというのは、お給料がないということになる。そうすると住まいの問題、さっき小田川さんがいろいろアパート借りるときの話で、保証人がいないとか、家賃の 2.5 倍の初期費用が必要とか、家財道具が必要、お金も必要になってくる。仕事がないとお金もないし、収入がないのに家賃をどうやって払うんだって話になって、やっぱり仕事の問題っていうのは、住まいの問題とすごく密接に関係してるんだなというのに気づいて、こんなところから若者の住まいの問題にも関心を持つようになりました。

さっきの荒井さんの話で、荒井さんが出会う若者は行政嫌とか、難しそうだし、真面目そうな人たちが真面目に考えて作った制度とか仕組みっていうのはなんかよくわからん、取っ付きづらいついていうことだったんですね。公的支援のカルチャーみたいなことがありつつも、私はどっちかといえば、それでもやっぱり公的支援も必要だよっていうところに関心があります。なのでその溝をどうやったら埋めていけるのかっていうことを一緒に考えていきたいと思っています。どうでしょう、荒井さんと事前にお話したときに、私は結構、制度の壁とか隙間とか穴とかっていう言葉を使ってお話ししてたんですけど、そもそも隙間とか穴どころの騒ぎじゃないっていうふうなことをおっしゃってましたが、その辺、現場での実践から感じることを、見えることを話していただけませんか。

### 荒井：

そうですね、まず私達って、どうやって若者と出会うかは行政からの紹介がほとんど。最近になって、その変な Twitter やり始めてから、Twitter からいっぱい来る感じになってきて。メディア露出が増えていって、最近 Web サイトに「ご相談ここで」という窓口を一個作ったら、そこからも入ってくるようになったんですけど。基本的には行政から繋がってくる人が多いです。こんな訳のわからない団体に、なんで行政の人がいっぱい繋がってくるかっていうのは不思議で。いくつかあるんですけど、スクールソーシャルワーカーの人たちが、中学校までしか見れなくて、高校以降すごい心配な子がいる。で、サンカクシャさん見守りをお願いしますってパターンがまず一つ。

あと、子ども家庭支援センターとかは 18 歳で切れちゃうから、その後心配だからお願いしますって。最悪の場合だと、18 になってぎりぎりにつなげてくるみたいなことがあったりするんですけど、そういうの含めてあたり。あとはやっぱり見守る、継続して誰かの目が必要っていう子は結構たくさんいて、そういう子の場合はやっぱり居場所を使わせてほしいっていう場合が多くて。困りごとが明確じゃなく、なんかしんどいけど本人のニーズもあんまり聞けてないし関係もできてない場合には繋いできて、様子見てほしいっていうのが結構あったりする。なので、こんだけいっぱい繋がってくるってことは、こんなところに制度の足りてない部分があるんだなってことはよく見えて、その集合体みたいになりつつあるところは、あるかなと思うんです。そういう制度の話もあり。

私はやっぱり一番は、そのカルチャーのギャップっていうのはもう若者になればなるほど、難しくて。頼ってねとか、相談してねって言うものの、やっぱ彼らも人を選ぶじゃないですか。彼らの信頼できる大人のランキングの上位ってユーチューバーとかで。あれって何かっていうと、人となりか日頃の発信でわかるし、どういう人がどういう考えか、どういうバックグラウンドを持ってるかわかるんですよ。

一方、行政とかの人たちって、何者かわからないし、毎回担当違うし、怒られるんじゃないかみたいに思ったりする。私も区役所行くと緊張するんですけど。っていう感じだと

若者は、信頼もへったくれもないんじゃないかなって思うので、もうちょっと親しみやすさを持ってたりとか、中の人がわかったりとか、構造的にはすごく難しいんですけど、そういう若者目線に立ったときに、どういう人だったら信頼しやすいかっていうのを逆算して、制度じゃなくて、たぶん窓口のあり方とか、行政の相談っていうんですかね。立ち居振る舞いとか、言葉の使い方とか、物の作り方とか、一新しないといけないぐらい、カルチャーの溝はすごいあるんじゃないかなって思うので、さっきも話しましたが、18歳まではちょっと整ってる。義務教育までは整ってるけど、それ以降本当に何も無いっていう話をさっきもしてて、自治体としても、国の制度がないと動けない、国も何も無いみたいな話になったので、何を変えてったら、どの制度を変えていったら改善するのが、もはやすごいわかんないんですけど、その辺は今日はちょっとヒントを得られたらいいなという気持ちが、私があります。

#### 濱田：

ありがとうございました。最後のところで話したいような内容にも少しずつ入っていったる感じもありますが、時間の関係もあるので、どうでしょう、お二人とも別に行政の方ではなく、NPOと、中間支援団体の方ということですが、そこでのいろいろなチャレンジとか、突破口を作るとか、あるいは最初のきっかけを作るとか、見つけるっていうのは、お二人とも日々の活動の中からもいろいろあると思います。じゃあ、支援をどういうふうに必要としている人たちに届けているのかとか、支援をしている人をどうやって支援しているのかっていうのを、それぞれご用意してきていただいた資料に沿って、ここから一人15分ほどでお話いただければと思います。

#### 濱田さんのお話

ということで、それでは、まず私から日本の住宅保障の課題とか、あるいは生活保障の仕組みというのがどういうふうになされてきたの、国際的に見て日本の住宅政策ってどんな特徴があるのか簡単にお話ししたいと思います。

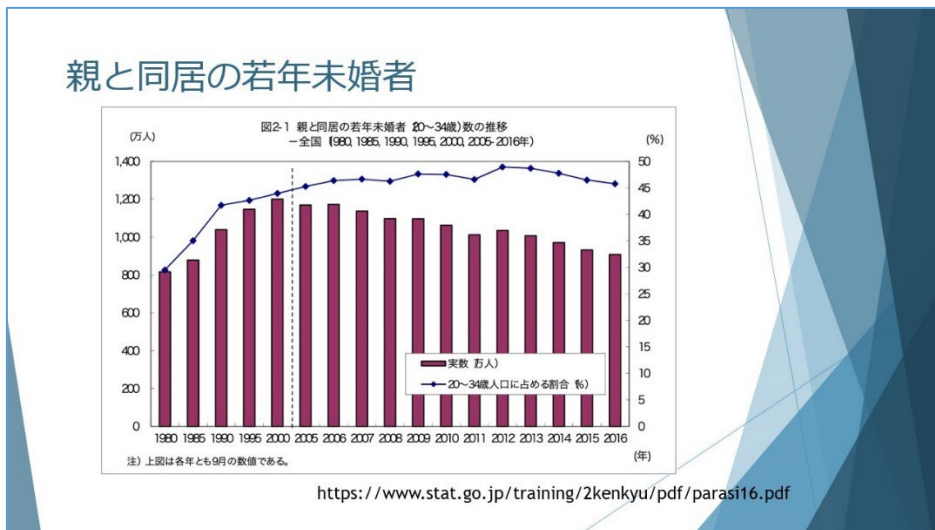
それでは、日本の住宅保障とか、社会保障の仕組みと特徴を簡単にお話して、大枠を最初にお示ししたいと思います。日本の社会保障制度の特徴は、一言で言えば「雇用を通じた福祉」という社会保障の仕組みにあると言えるかと思います。この「雇用を通じた福祉」って何かといえば、前提として、男性稼ぎ主の長期、つまり終身雇用、新卒で一括採用で採用されて、入った会社に定年まで勤め続けるという安定した男性稼ぎ主の仕事と、その男性稼ぎ主のパートナーで、家の中で家事とか育児とか介護とかをしてくれる主婦がいるというのが前提になった仕組みです。この「雇用を通じた福祉」の中で、住まいとか住宅はどのような位置付けにあったのかというと、主には男性稼ぎ主の企業福祉の一環として住宅手当が支給されてきたというところに特徴があるわけです。つまり、働いている



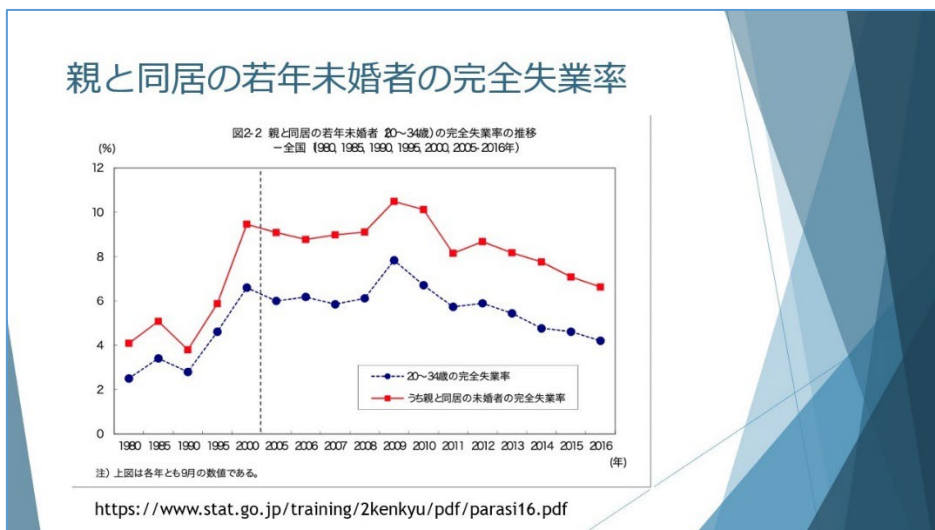
稼ぎ主、多くの場合は男性なのですが、その人のお給料に上乗せする住宅手当という形で支給されてきました。家の中のことは、その女性パートナーで、主婦が行うという仕組みになります。なので、公的な仕組みとして見てみると、人生前半のリスク、例えば病気になって働けないとか、失業するとかですね、そういう人生前半のリスクというのは、基本的に、企業と家族で対応する。公的な社会保障っていうのは人生の後半、働けなくなったあと、一番わかりやすいのは年金という形で、人生の後半に集中してきたということになります。公的なセーフティーネットが非常に弱いため、安定した仕事と安定した家族が揺らいでくる、あるいはどちらかを失ってしまうとなると一気に困窮に陥るリスクが高まるというのが、日本のこの「雇用を通じた福祉」の特徴だったわけです。

あとはですね、若者の場合は「親セーフティーネット」っていうような言い方をすることがありますけれども、親が公的なセーフティーネットの代わりに家とか、温かい食事とかケア全般を提供するっていう役割が非常に大きかった。なので、頼ることができる親がない場合には、やはり非常に厳しい状況に置かれてしまうわけです。これが「戦後日本型循環社会」っていう図式化したもので、東大の教育学者の本田由紀さんがこういうモデルを作って説明をしているわけですが、仕事と学校と家族がこういうトライアングルで、それぞれに相互に人とか労力を送り入れながら、安定した社会のシステムを作ってきたというのが戦後の日本の大前提としてあったわけです。なので、性別役割分担、夫は仕事、妻は家事で、仕事と家族がともに安定をする。学校と家族の関係としては、家庭、主には母親になりますが、母親が子どもの教育に力を入れながら子育てをする。学校と仕事の関係としては、教育が優秀な労働力を提供する。その場合、新卒一括採用というのは、日本の働き方っていうか、採用の仕方の特徴ですが、そういう形で、新卒一括採用を制度化して、学校から仕事への移動をスムーズに作ってきたところに特徴があったわけです。ですが、これが90年代入って徐々にほころび始めて、ちょうどその頃多分小田川さんが野宿者の問題と出会って活動を始めた頃ですが、野宿の問題、初めはもう少し中高年の人だったのが、若者にも顕著に見えるようになってきたっていうのが90年代、2000年代に入ってから日本の現状ということになってきます。

資料2 (濱田作成)



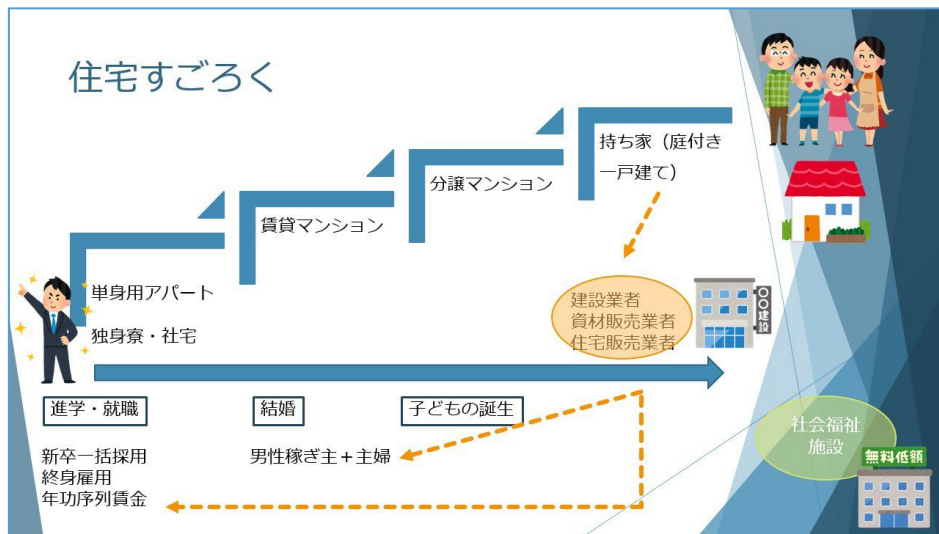
資料3 (濱田作成)



先ほど「親セーフティーネット」という言葉を使いましたが、親と同居している若年未婚者、つまり結婚していない若い人はどのぐらいの割合いるのかというと、1980年代から2016年までの数値、推移はこんな感じになっています(資料2)。棒グラフの方が実数、実際何人いるのかっていうので、折れ線グラフの方が20から34歳の人口の中でも親と同居している未婚者っていうのが、20から34歳の未婚者というのがどのぐらいいるのかを示したものになりますが、80年代はですね、三割ぐらいだったのが、2000年代、2010年代入ってくると半分近くになっているっていう、かなり増えているような状況になっています。で、次のグラフで見えますと(資料3)、親と同居している若年未婚者の失業率っていうのが、グラフにしたものですが、青い方の折れ線グラフは20から34歳の完全失

業率、赤い方がその内、親と同居している未婚者ということで、親と同居している未婚者の方が失業率が高いってというような状況がずっと 80 年代から続いているってようなことです。やはり、仕事と家族と家、住まいってというのが非常に密接に関係しているってところが、こういったところから見えてくるかと思います。

資料4 (濱田作成)

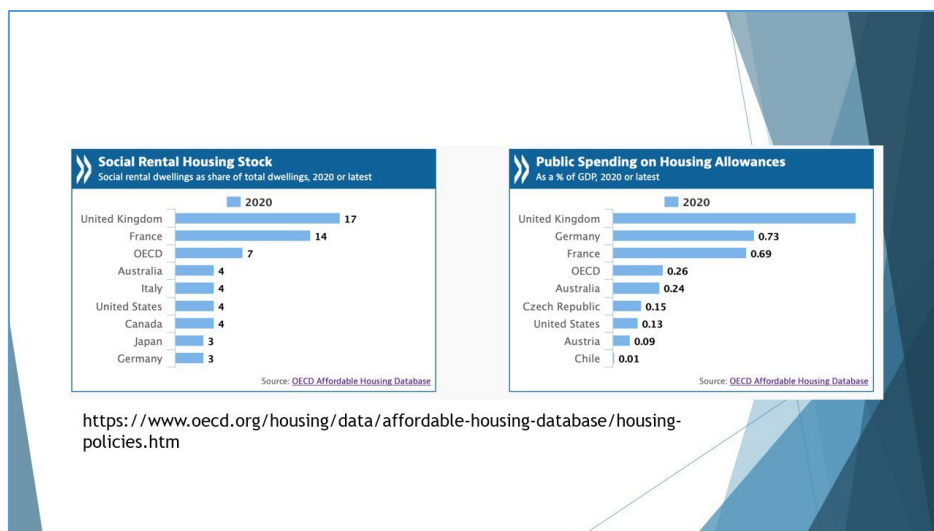


じゃあ、日本の住宅政策いったいどんな特徴があるのかというと、男性稼ぎ主の企業福祉の一環だったっていう話を先ほどしましたが、住宅政策っていうのは中間層が持ち家を取得するための支援が中心でした。「住宅すごろく」なんていう言い方もしますが（資料4）一体どういうことなのかっていうと、一番初めはキラキラしている、頑張ってるみたいな若者、若い男性のイラストありますけれども、一人の単身用のアパートとか独身寮とか社宅から始まって、その後ですね、結婚して賃貸マンションに移る、その後子どもが生まれたら分譲マンションに移って、最終的には庭付きの一戸建ての持ち家にたどり着くってような、それがゴール。あと人のライフコースがこんな形で重なってきます。持ち家のところからですね、オレンジの点線で建設業者、資材販売業者、住宅販売業者なんていうふうに矢印が出ていますけれども、要は、家を買うためには非常にたくさんお金が必要になりますし、長期にわたって住宅ローンを組むということが一般的だったわけです。新卒の正規雇用とか終身雇用とか年功序列賃金というものがそういう制度を支えていたし、家を作るにあたっては、建設業者とか、住宅販売業者っていうのも必要になります。新卒で入った会社で、男性稼ぎ主はそのまま定年までそこで働く、女性はそこで出会った人と結婚して、主婦になって、子どもが生まれて、子どもの教育に力を入れていくってようないろいろな波及しながら、日本の社会システムを支えてきたってところがあったわ

けです。

ですけれども、この「住宅すごろく」が成り立たない状況が生まれたり、そもそもこの「住宅すごろく」に入らない人っていうのも元々昔からいたわけです。そういう人はどこに行ったかっていうと、この右下にある「社会福祉施設」とか、あとは生活保護の住宅扶助を受けてきました。なので、日本の20世紀型の住宅政策の枠組みっていうのは、大きく分けると、働いている労働者や標準的な家族とそれ以外に分けられてきました。働いている労働者や標準的な家族は先ほどの「住宅すごろく」でステップアップをしていくことを目的にして、最終的には持ち家にたどり着くっていうことが住まいの形として出されてきたわけです。そこに入らない人たち、高齢者とか障害者とか低所得者とか、標準家族を作ることができない人たちには、あくまでも残余的な救済として、社会福祉施設とか生活保護の住宅扶助というようなものが用意されてきました。なので、公的に住宅を保障するっていうのが、日本の場合なかなか行われてきませんでした。

#### 資料5（濱田作成）



資料5は、OECDのデータで日本がどのへんに位置づけられるのかっていうのを示したものになります。左側、住宅ストックに占める公営住宅の割合で、右側が住宅手当への政府支出の対GDP比になります。右側の住宅ストックに占める公営住宅の割合っていうのは、OECDの平均が7%ぐらいなんですけど、それに対して日本はですね、その半分ぐらい、3%です。なので、非常に少ないし、対GDP比で見ても、一番多いのはイギリスですが、日本は0.1%程度ということで、アメリカのちょっと下ぐらい。OECDの平均%なので、その半分以下っていうような状況にあるわけです。そんな形で、日本は働いている人の標準家族をベースにした住宅政策を作ってきたので、そこに入らない人たち、特に、そこに入らない若い、親に頼ることができない人たちっていうのは、先ほど小田川さん、荒

井さんから話があったように、シェアハウスとか、あるいは漂流するしかないっていうような状況が、ある意味制度的に作られてきた、増やされてきたのが日本の現状になるわけです。私からは、以上のような形で大枠をお見せする形にしたいと思います。

続いては、こういういろんな特徴とか、穴とかですね、そもそも穴どころの話じゃないっていうこともありました。これに対して、実践の現場では、じゃあ一体どういう活動がなされているのか、どんな形で漂流する若者と繋がっていくのか、荒井さんからもう少しサンカクシャさんの活動についてご紹介いただけたらと思います。

### 荒井さんのお話

NPO 法人サンカクシャの代表の荒井と申します。改めましてよろしくお願ひいたします。大枠の後に一気に「ド現場」に入るの、よろしくお願ひします。一旦、サンカクシャまず何やってるかっていうところの説明を、ちょっと駆け足でさせていただきます。私達は、「親や身近な大人を頼れない若者がどんな道に進んでも生き抜いていけるように」というテーマを掲げて、親や身近な大人を頼れない若者を対象にしています。ちょっとだけ余談を話すと、コロナが流行る前は、割と放課後普通に学校終わってフラッと来る子もたくさんいたんですけど、コロナを境に、家にいたくないとか、家で自粛するのしんどいとか、そういった子たちの利用の割合がすっごい増えてきたので、ほとんどの子が家にいたくない、もしくはやっぱ虐待を受けてるとか、そういうような感じになってきました。

今 200 人ちょっとぐらいの若者に伴走していて、本当一人ひとり、3年とか5年とかかけて関わっています。「ゴールって何ですか」ってよく言われるんですけど、だんだん会わなくても、自分で頑張れるような状態になったりするような状態がゴールかなと思っていて、何か困ったときにフラッと相談に来たりとか、実家に帰ってくるみたいな感覚で、うちに訪ねてくる子が出てくるんですけど、そういうような感じが私達の伴走のスタイルかなと思います。

やっていることは、居場所作りと仕事のサポート。あと最近住まいのサポートを始めました。1ヶ所閉じちゃったんですけど、居場所はまだ今都内に1ヶ所、シェアハウス4ヶ所。シェアハウスをもうちょっと増やしたいなと思うところです。





資料6（荒井作成）

サンカクシャの活動概要

親や身近な大人を頼れない若者が  
どのような道に進んでも生き抜いていけるように

200名の若者に伴走

居場所作り	仕事のサポート	住まいのサポート
 2ヶ所		 4ヶ所

資料7（荒井作成）

サンカクキチ

居場所：上池袋（豊島区）

**サンカクキチ**

株式会社READY FORの助成を受けて実施

- 豊島区上池袋4丁目
- 毎週水曜・木曜・土曜日  
14時～21時まで
- 社会人も利用できる  
コワーキングスペース
- イケア・ジャパンより  
内装の提案と家具の寄贈
- 仕事の体験や進路相談など  
のプログラムも実施

資料7のような感じで、「サンカクキチ」という居場所、今は週3日ほど開けています。イケア・ジャパンさんの内装の提案と家具の寄贈、無償の提供をしていただいたので、すごいおしゃれな拠点になっていて、やっぱり場の持つ空気感とか、すごい大事だなと思

うので、あんまり堅苦しくない、ちょっとオシャレすぎてショールームっぽくはあるんですけど、意外とみんななじんでたりするんですけど、こういう楽しい空間を作るっていうことをすごく大事にしています。

あと、最近「サンカククエスト」という名前をつけて、地域の人たちからいろんな仕事の体験の機会をいただいたりだとか、実際にやっぱり雇ってくれる企業もたくさん増えてきていて、若者たち、結構バイトとか仕事ってなると引いちゃうんですけど、「クエスト」とかって名前がついてるとゲーム感覚があるといいなどは思ってこんな名前つけたりしています。なので、結構地域のいろんな人たちから仕事をいただいたりしていて、地域で仕事って側面から若者を応援してくれる人が今すごく増えてきているような状態ですね。20社ぐらいから、仕事をいただいたり、雇ってもらったりしてるので、地域のいろんなお店で若者が働いて、私達スタッフとボランティアの人たちがよく食べに行くってことが最近よく起きたりしています。

資料8（荒井作成）



こんな（資料8）eスポーツの取り組みとかもやって、今若者たちとオンラインゲームをやって日常的なコミュニケーションをほとんど取っていて、居場所とか来ない子とかとはオンラインゲームでよく喋ってるって感じです。私、夜12時から夜中3時ぐらいまで毎日ゲームやってるんですけど、そこで若者と一緒によくやったりしています。

サンカクシャは、自分たちから繋がるようなアプローチや、アウトリーチの取り組みを

行っていたり、行政とかと連携を結構やっているんで、割と行政から「この子見てください」という形で繋がるフェーズがあって、その次に、居場所やシェアハウスを通じて、安心できる場をまず提供できたらいいなと思います。その後、安心できる場があってすぐ自立するわけではないので、とにかく全然働けないとか、働きたくないって思ってる子たちがいろんな体験を重ねて自信をつけていって、何とか仕事して一人暮らしして生きていけるように、そのプロセスを3年とか5年とかかけて、一人ひとりに伴走するという感じで、この伴走の3年から5年にいろんなドラマがあるんですけど、今日はその一部をお見せできたらいいかなと思います。

今日のメインが、サンカクハウス、というシェアハウスです。今、都内で四拠点作って、26名分とありますが、ギチギチにするとトラブルがすごい起こるので、26名定員やめて今20名定員ぐらいにしている、ちょうど今ぴったり20人住んでいるような状態です。これぐらいが限界かなと思っています。家賃月3万円で住めるシェアハウスで、プラス水道光熱費8000円を居住者には払ってもらっています。水道光熱費は前まで、もうちょっと安く設定していたんですけど、シャワーを朝夜1時間浴びないと気が済まない子とかがいて、水道代が高くなったりエアコンの冷房を20℃強風マックスみたいな感じで、無制限に使うので、だんだん光熱費を引き上げていって、このままだと1万超すぞって警告している感じですね。

あとでお見せしますが、イケア・ジャパンさん、本当はさっきの「サンカクキチ」だけ支援していただく予定だったんですけど。ちょっと余談なんですけど、古い空き家を借りたんですよ。そうすると、電気系統が古くてエアコン導入するのに莫大なお金がかかって、家具を買うお金なくなっちゃって。「空き家いい」と言われるんですけど、修繕の費用がすごいかかるので、普通に借りた方が安いんじゃないかと思うんですけど。そんなこんなで、家具を買うお金がなくなって、イケア・ジャパンさんに相談したら、ベッドや寝具、キッチン雑貨類などを寄付してくださり、なんとかなりました。

資料10はこの前の読売新聞に取材されたときに撮った写真なんですけど、こんな感じでよく一緒にゲームしていて、日常会話のほとんどがゲームの話だったりしています。キッチンは写真では綺麗なんですけど、放っておくと、とんでもなく汚れます。スタッフがご飯とか作るんですよ、そうすると1週間放置して、ドブのような臭いがしたっていうのがこの前あって、「もうご飯作らないぞ」とスタッフがブチ切れていました。

初期費用なしで、家賃2ヶ月最初免除してます。理由は、所持金が全くない子からの相談が多くて、入居を躊躇しちゃう子がいるからです。



資料9（荒井作成）



サンカクハウス

都内に4拠点  
26名分の住まいを提供

月3万円+光熱費8,000円

イケア・ジャパンより  
家具の寄贈

初期費用なし

2ヶ月間家賃免除

社会福祉法人中央共同募金会の助成を受けて実施

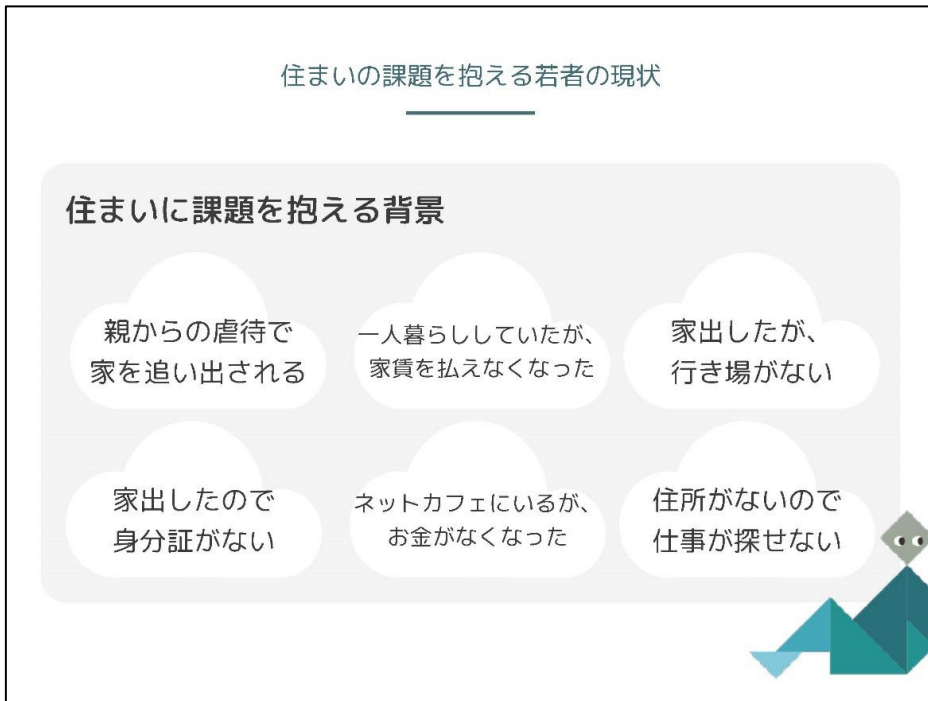
資料10（荒井作成）



私たち、2020年の7月に一拠点目を立ち上げました。きっかけは、ホストをやっていた子がいて、その子が深夜に電話かけてきて、「今から八王子に来てくれないか」と。私が当時、池袋近辺に住んでいて、当然「行けない」って言ったら、「今日お客さんがつかな

いと自分はクビになる」と。寮付きの仕事なので「家もなくなるから困っているから来てくれ」って言われたんですけど、「行けない」って言って、翌日の面談をして、そしたら本当に仕事もなくなって家もなくなっちゃってどうしようってなって。たまたまこの頃、シェアハウス物件、っていうか民泊、オリンピックが延期になって、民泊って結構撤退した時期だったんです。で、知り合いの不動産会社から、「場所は空いてるけど」って物件を見せてもらったら、居場所じゃなくて、これは住めるんじゃないかと。あいつに貸せるんじゃないかと思って、事務局の人に半分ぐらい内緒で物件契約して、初期費用 60 万ぐらいかかったんですけど、「お前ふざけんな」って言われて、でも「本気で集めるなら許す」って。助成金をいっぱい申請したら 900 万ぐらい取れて、よかったって感じで始まったのがこの事業です。

資料 11 (荒井作成)



どんな子が来てるかっていうのを、ちょっとバーっと並べてみたんですけど(資料 11)、親からの虐待で家を追い出される子が結構多いですね。「お前なんか生まれてこなきゃよかった」とか、実際にもう「家出てけ」って追い出されたり、あと鍵交換されて家入れなくなっちゃった子とかもいました。あと、一人暮らしして家賃払えなくなりましたとか、結構コロナでなかなか親子関係うまくいかなかったり、ずっと仕事してなくて親にすごい文句言われたりとか、いろんなひどい言葉を言われて家出しちゃったけど行き場がなくて子供がいたり。家出したけど、身分証とかもないし、所持金もないし、家借りられない。さっきの話にもあったように、アパートを借りるのすごいハードル高いと思うんです

けど。そんな形で、身分証とかもないし、仕事もないし、頼れる人もいないし、住居もないみたいな状態で、漂流している若者たちがたくさんいたりします。

あとは、「今ネットカフェにいます、あと二泊するとお金なくなります」っていう相談結構多かったです。ネットカフェに一旦避難して、なんとかしのいでるって子が多かったです。住所ないから仕事を探せないとか、そんなような子たちが結構たくさんいて、ほとんどが虐待を受けた経験があって、半分ぐらいは養護施設とかに一時期入った経験もあって。そんな感じで、親は頼りません、友達がいない、仕事もやっぱ転々としてなかなか安定してないっていう状態で、常にお金がないっていう感じの子が多かったです。

ちょっとだけ入居のデータ、人数は今20人。男性15、女性5人です。最近、女性用のシェアハウスを一拠点作ったんですけど、女性の相談がすごい多くて、もう一拠点作ろうかなと思っています。10代が7人ですね。高校生がほとんどで、行政からの紹介で来ている子が多いですね。生活保護を受けるようになった子たちは6人ぐらいいて、みんな自力で頑張りたいとか、制度を使いたくないとか、行政のサポートを受けたくないって子が多いんですけど。頑張ってるんですけど、いろんな壁につまずいたり、やっぱ医療にかかった方がいいとかいう理由で、生保に繋がっている子が結構多かったです。家賃滞納者9人。生保を受給している子からは家賃をもらえているんですけど、それ以外の子たちで、自力で家賃を払っているのは、一人しかいないっていう。3万8000円ですよ。あんなに水も使うし、エアコンとかも使うのに、めちゃくちゃ滞納している人が多いのが現実です。

シェアハウス1年半ぐらいで卒業しようって目標で掲げています。最初は行政からの紹介とか、支援機関からの紹介とか、弁護士の人からの紹介とか。自分で問い合わせしてきたり、私のTwitterから繋がってきたりっていうことがあります。最初に入居の相談をして、見学して、住もうってなったときに、身分証を親が管理していて持ってこられないとか、なくしちゃったとか、そもそも持ってませんとか。銀行の口座開設すらしていない子もいて、どうやって生きてきたのっていうことは結構よくあります。身分証の再発行の手続きは、ありとあらゆるパターンをもう20ケースぐらいやりました。最初、1ヶ月後、3ヶ月後、半年後ぐらいでどんなふうになっていくかっていうプランを一緒に考えて、面談します。

次が、日払いのバイトを探そうと。みんなだいたい所持金200円とか、700円とかそんな感じなんで、まず一旦サンカクシャから5000円の給付を現金給付して、身の回りの物を整えてねって言うんですけど、5000円で大体みんな美味しいの、コンビニでお菓子めっちゃ買いまくるみたいな、そのお金使ってもうちょっとなんかしなさいよと思うんですけど、そんな感じの子が多かったです。まず日払い一緒に探して、とにかく手持ちの現金増やすって取り組みを一緒にやって、それが落ち着いてくると、週1〜3日ぐらいでバイト一緒

に探そうというところで、サンカクシャが連携している色んな団体とか企業から仕事をいただいたりする場合があります。

その期間がだいぶ長いんですけど、そろそろ1年経つ子たちはだんだん一緒に、一人暮らしの物件を探したり、一人暮らしのサポートを受けて、伴走するという感じです。その間に公的支援に繋がったりとか、いろんな団体に紹介したりっていう形で、他の団体と一緒に連携してみることも多いです。ちょっとだけ、かいつまんで言うと、シェアハウスには、やっぱりいろんな背景の子が来るので、いろんなトラブルがあって。OD（オーバードーズ）で自殺未遂して、救急車で運ばれて、ICU入って医療費44万みたいな。当然払えない。最近盗難が四件ぐらい続いて。喧嘩して壁に穴が開いて、さすがにその写真は出さないようにしようと思ったんですけど。ほかにも、親がすっごい連絡してきて会いに来たり、夜中の騒音がうるさいとか、近隣の住宅にタバコの吸殻を捨てる子がいたり、掃除しないと大変、という感じです。

資料 12（荒井作成）



これ（資料 12）私の Twitter です。ここに「シェアハウスをやっています」って書くと、「こんにちは、シェアハウスのツイートを見て連絡させていただきました」みたいな連絡が大体深夜に届く。いろんな業者を見て同じような書き方をしてみたり、ハッシュタグを使ってみたりすると、本当にこれ結構届いて、大体深夜帯にツイートすると、深夜帯に返信が来ることが多かったです。住まいに困って、ネットで検索して、行政の情報は面倒くさそう、で、昔あった嫌な記憶を思い出して、SNS で探して、怪しい情報に触れて、

連絡して、変な業者に引っかかって、サンカクシャに繋がるってルートが結構多かったりして。タコ部屋みたいなものやっている、変な業者から逃げてくる子たちが私達のところへ来ます。

今後、地方拠点とかも作って、若者たちが生活コストを落として生き抜いていけるモデルを作ったりしていきたいなと思っていて。東京でキャッチして、地方で暮らしていくモデルとかも作っていきたいなと思ったりしています。以上です。ありがとうございました。

#### 濱田：

ありがとうございました。非常に臨場感もあるし、やっぱり日々最前線で活動されている方の話っていうのはすごい引き込まれるなと思ってお話を聞いてます。また後でいろいろ質問とかもさせていただければと思います。そしたらですね、次は、こういう荒井さんの活動を後方から支援している小田川さんの活動についてお話しいただければと思います。

#### 小田川さんのお話

先ほど私は、野宿状態にある若者たちとの出会っていうところで関心が始まったとお話をしましたけれども、今荒井さんの話を聞いて、野宿状態になる若者たちと荒井さんたちの活動っていうのは本当に深く関連しているなと思いますね。若者世代は、社会保障の制度がすぼんと抜け落ちているので、そこをどうするかということで、荒井さんたちの団体が、試行錯誤して、ものすごく新しい切り口でチャレンジしてくださってるのは本当にありがたいなと思って伺っています。

こうした若者たちを支援する、特に住宅の面でどのような方策が考えられるかということ、大きく三つあるのではないかなと思います。これは若者に限りませんけれども、まず、住宅費ですね。アパートを借りるための家賃であるとか、そういう経済的な部分の支援というのが、一つ大きな柱としてあるのではないかなと思います。二つ目は、家そのものですね。現物給付として、公的な住宅、公営住宅とかありますけれども、そういう実際に入居できる住まいそのものを提供するということが二つ目です。もう一つが、ケアですね。生活支援であるとか、相談支援、伴走支援、そういったものがあってこそ生活が安定しますので、住まいに繋がりがやすくなる、安定的に住めるようになる。ということで、住まいの支援というと、三つの柱があります。荒井さんたちの活動は、この三つを統合するような取り組みなのかなと思って伺っておりました。

で、私が今仕事で中間支援団体として支援しているのは、こうした荒井さんたちのような取り組みをしてくださっている現場の民間の団体の活動をバックアップするという立ち位置なんですね。現場で活動してくださっているなかで課題が見えてくるわけですね。そこから、政策はどういうふうに変わっていけば若者たちにとって救いになるだろうか、若者たちが安心して社会を生き抜いていける、そんな環境が作れるだろうか、そういう観点

で、政策提言の取り組みをやっていきます。

ユニバーサル志縁センターは、とりわけ社会的養護の若者の自立支援に力を入れています。社会的養護って何？ということなんですけれども、先ほど荒井さんのお話の中で、入居者の半分は施設で生活したことがある人ですとおっしゃいました。その施設は児童養護施設と呼ばれるもので、そうした施設や里親のところにいる子どもたちの多くは虐待などで家では安心安全な環境が得られない、適切な養育環境が得られないから、公的な仕組みの中で養育をしていくという制度があって、それが社会的養護なんです。

今、その虐待の件数はすごく増えてきていて、直近ですと、年間20万件的虐待の相談があるということです。これは近所の人から見たらちょっとおかしいなと思って通報するみたいなのも含めてのことですので、この内容はすごく様々なんですけれども、この相談の中から深刻な状況にある子たちが施設や里親に保護されていくということになります。ただ、足りてないんじゃないかというふうに思います。また、施設で育った子たちが社会に出るときの支援が今のところまだまだ十分ではないという状況です。だからこそ、荒井さんたちの活動が必要になってきているんです。

社会的養護は子どもの制度ですので、この制度の中で支援するのは、原則18歳までなんです。学校に行っている場合は22歳まで延長できる制度ではありますが、18歳になったら、施設を出て、ひとり立ちをしていかなければならないという場合が多いです。高校を卒業した後、一般家庭の子どもさんは、進学を選ぶ子が多いんですけれども、施設の子は就職を選ぶ子が六割近いです。やはり高等教育に進むにはお金もかかりますので、子どもたちは自分たちで学費を稼がないといけませんので、施設出身の子の大学進学率は一般家庭の子に比べて、とても低いですね。三割ちょっとぐらいです。そういうこともあって、不安定な仕事につきがちで、社宅付きの仕事が見つかったらよかったというような形で施設を出ていくことがよくあるわけです。そうすると、先ほど、派遣切りの話をしましたが、社宅付きの仕事、社宅つき派遣の仕事は特に、住まいも不安定になりがちです。そうした中で、人との繋がりも薄れていって、困ったときに頼れる人がいないということになりがちなんです。

そういうときに、「いつでも話を聞くよ、相談にのるよ」って言ってくれるような人と出会い、「困ったんだ、どうしたらいいんだ」って話していけるような、サンカクシャさんの居場所であるとか、シェアハウスであるとか、そういった拠点があって、社会人のスタートの部分をサポートしてくださる、そういう取り組みがとっても大事なと思います。社会的養護の領域では、「アフターケア」と言うんですけれども、そこがとても重要です。この数年でずいぶんと、制度的にも、だんだん充実してきてはいるんですけれども、まだまだ足りないところがあるよってということが現場から見えてくるんですね。

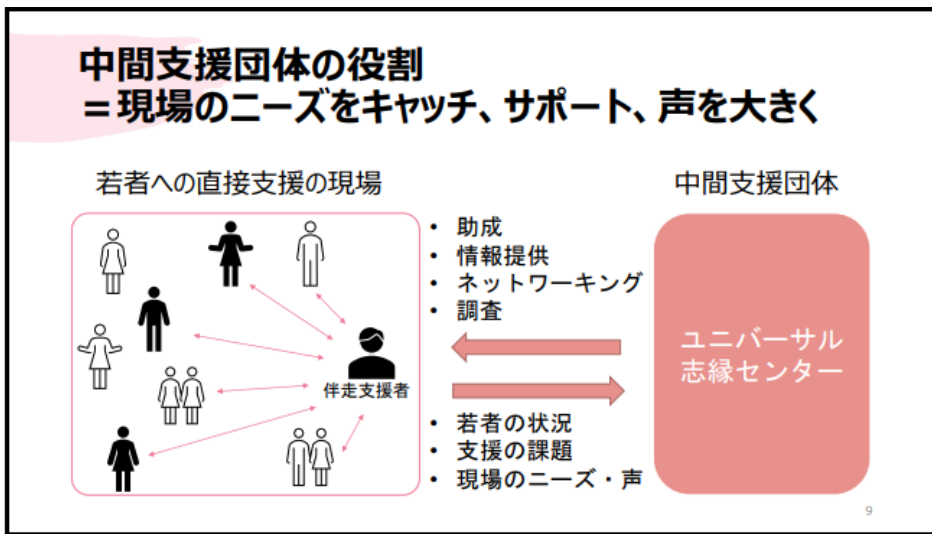
私達の団体は、そういうことで、社会的養護の若者の自立を支援するネットワークを作ろうということで、問題意識を共にする市民団体、生協さんとか、ワーカーズコープさん



とか、研究者、そして現場の皆さん、元官僚だった方々とかと、一緒に仕組みを作ろうということでネットワークを作りました。困難な状況にある若者たちに寄り添って伴走支援をしてくださる方を通じて、若者を支援していこう、伴走支援そのものをサポートするという発想で取り組みをやっています。

内容は、まずは基金を作りまして、たくさんの方からご寄附をいただいて、それを原資に、現場の取り組みをサポートしていこうという助成事業をしているほか、就労支援のプログラムをやっています。そこからいろんな課題が見えてきます。助成先の団体さんたちは、今の公的な制度によっては対処できないニーズがあるから、民間でこれをやらなくちゃいけないということで、活動してくださっているわけですね。そこには公的な資金はつかないから、民間で助成をさせていただくという構造になっているわけです。つまり、その助成をさせていただいている取り組みそのものが、隙間問題に対処するものになっていると思うんです。ですので、助成事業をすることで、社会の隙間が見えてくる。そこに政策提言をしなくてはならない制度、政策の課題があるということが言えるかと思います。

資料 13 (小田川作成)



私達は中間支援団体ということで、資料 13 の右側の立場にいて、現場で若者に寄り添って伴走してくださっている皆さんに助成をさせていただいたり、情報提供をしたり、皆さんを繋いで、学び合う場をつくったり、あるいは調査をしたりといった働きかけをする中で、若者の状況を教えていただきますし、支援現場でこんな難しいことがある、日々大変だみたいな話を聞くわけです。そういう現場のニーズ、声、それがやはり、政策を作る立場の方々に届かないといけないわけですね。ですので、私達は、現場のニーズをキャッチして、サポートして、それで皆さんの声を大きくする、それが自分たちの役割かなと思っています。そのようにして、社会的養護の若者の支援の制度が充実すれば、荒井さんた

ちの取り組みも制度の中に入っていく可能性があるのではないかと思います。

社会的養護の若者を支援する制度は、児童福祉法に基づいて作られている制度なんです。その児童福祉法の改正法案の策定が2022年に予定されていたので、そこに提言をしていけばいいのではないかとということで、私達は児童福祉法の改正案を検討する政府の審議会の動きに合わせて政策提言をしていく取り組みをやってきました。政策提言をするときは、その制度がどういう法律で規定されているのかとか、その政策決定に最も影響力を持っているのは誰なのか、誰が考えて作ってるのかというプロセスなんかも把握した上で、現場の声を代表するような提言を工夫してやっていきます。現場の声をうまくキャッチするには何をやるかということですが、私は毎月荒井さんの話を聞くということはやっているんですけども、やっぱりそれだけでは良くて、全般的にはどうなっているのかということを知る必要があるので、2021年5月、アンケート調査をしました。それをまとめて政策提言を出したんですけども、全国で現場の団体を束ねているいくつかの全国団体の皆さんと一緒に連名で、政策提言をするということをやりました。内容をしっかり検討してまとめたものを、厚生労働省であるとか、子ども政策担当大臣のところにお持ちして、現場の方に直接話をさせていただいて、ご理解いただくというようなことを重ねてきています。

一方、現場の皆さんも、今政策がどう動いているのかとか、何が課題になっているのかとかについて、知ったうえで一緒に声を上げていくというようにする必要があります。ですので、そういった観点から、現場の皆さんの意見交換会を企画して、問題意識を共有する場を作ったりしています。そうした甲斐あって、私たちの政策提言を受け止めていただくことができまして、児童福祉法が少し変わりました。アフターケア事業が法律に規定される制度になりまして、若者支援の現場が拡充していくことになりそうです。(2022年)10月の現時点では、新たな制度の具体的な仕組み作りが検討されているところで、そこでも、現場の意見をちゃんと言っていこうということで、また取り組んでいるところです。そういうことで、今年また改めて政策提言をしているんですけども、その中で、とりわけ住まいに関わる部分というのが④(資料14)のところなんです。社会的養護を一度は離れた若者、あるいは、まだ社会的養護に保護されたことがない若者の緊急一時的な居住支援にかかる費用を補助してもらうような制度があれば、荒井さんたちがなさっているようなシェアハウスでの伴走支援の取り組みはとてもやりやすくなるはずで、助成金で事業をやるっていうのは結構綱渡りのところがありますので、こうした生活の基盤にかかわる住まいの支援はちゃんと制度化していただいて、現場が安定的に運営できて、若者たちにしっかり伴走できるような環境を整える、そんなことが実現したらいいなと思っています。



資料 14 (小田川作成)

## 新たな法律にもとづく新制度の設計に向けて あらためて政策提言 (2022年6月)

【政策提言の骨子】

1. 継続して自立支援を受ける必要のある子ども・若者の居住継続の意見表明権の保障
2. 社会的養護の自立支援にあたる専門職の person 費の拡充、保障
3. 退所児童等のアフターケアを行う事業の全都道府県での実施
4. 社会的養護を一度は離れた若者等への緊急一時的居住支援にかかる費用補助の創設

2022年6月  
新たな提言をまとめ  
厚労省に申し入れ



2022年10月  
若者支援全国団体役員と厚労省担当課の  
非公開意見交換会



ということで、若者の居住支援の制度がこれから強化されるか、注視していきたいと思っています。施設を出る若者たちが、準備ができてない状態を出なくちゃいけないということにならず、ひとり立ちの準備ができるまでちゃんと施設で住める、あるいは緊急宿泊費を補助してもらえる、あるいはケア付のシェアハウス事業に補助が付いて、様々な地域の若者たちが利用することができる、ということが実現できるとよいです。それから、アパートを借りる際の身元保証人確保対策事業というのが今あるんですけども、その対象をもう少し拡大してもらえるといいのではないかといいことも提言しています。果たしてこれらが実現していくかどうか。実現して、漂流しがちな若者たちが住まいにちゃんと繋がっていけるかどうか、注目していきたいところだなと思っております。

### パネルディスカッション

濱田：

ありがとうございました。伴走者を支援することから見えてくる課題っていうのが小田川さんの毎日取り組まれていることで、助成することで隙間が見えてきて、だからこそ、その隙間を埋めるための政策提言が必要じゃないかっていうような話だったと思います。この後、じゃあどうやってその隙間を埋めていくのかなんていう話もしていきます。

それでは、今お互いの報告を踏まえて、どうやって今の話を整理していけばいいのかとか今日の副題である政策形成に市民が参加していくことができるのかを一緒に考えていきたいと思っています。もし質問とかありましたら、オンラインの方はぜひチャットの方に書き込んでお送りいただければと思います。会場の方は後ほど、質疑、質問をしていただく時間をとりたいと思っています。

ということで、今荒井さんと小田川さんのお話を聞くと、いろんなステップがあるっていうようなことが見えてきたかと思っています。で、荒井さんは一番現場の最前線で、非常に

緊急保護的なことをされていて、日々深夜の SNS でのつぶやきから繋がっていくっていうような活動でしたし、小田川さんはそんな荒井さんを後ろからサポートするみたいな感じだったと思うんですが、どうでしょう、その先っていうのはどういうもの、どういうステップが必要になってくると思われますかね。

**荒井：**

事前の打ち合わせに、NPO とか民間、注目されすぎみたいな話が出ましたよね。

**濱田：**

そうですね、こういう NPO の活動にどうも光が当たり過ぎているんじゃないのか、それはどうなのよっていう話をしていました。

**荒井：**

やっている身として、やっぱり維持しないといけない。助成金って1年なんですよ、1年で制度化とか無理じゃないですか。なので、助成金3年ぐらい継続してあるといいなってすごく思うんです。やっぱり頑張って寄付を集めないといけないんですけど、そのときってなんかこう、ついつい「自分たちが全部やるっす」みたいなのか、お金出す側も「NPO が解決してくれるんじゃないか」みたいな意識があるんですよ。そういうのってあんまりよくないなと思って。

とはいえ引いた目で、自分たち民間ができるのって、私達も頑張っていますけど、せいぜい20人ぐらいしか見られないわけですよ。この数の小ささっていうものを、重く捉えた方がいいんだろうなという気がして。自分たちが頑張るだけじゃ多分駄目なんだなっていうのは、やっぱりすごい感じていて。担い手をいかに増やせるかっていうのと、そもそもこのニーズをやっぱり国とか自治体とかで何とかカバーできるように働きかけをしなきゃいけないんだなっていうのを最近気づきまして。十何年やってきて、「あんまり政策とか興味ない」と、ずっと思ってたんですけど、最近やっぱりあまりにしんどいというか、人数が多すぎて、自分たちだけでどうにもならんっていうのをすごい感じてきているんです。もうちょっとその背景を見て、やっていく必要があるかなっていうのと、「NPO に過大な期待しすぎじゃない？」みたいなのはあるので、「何でもはできません」っていうのは言っていかなきゃいけないなっていうのはすごい思いますね。

**小田川：**

とりわけ荒井さんたちのサンカクシャさんの取り組みはユニークですし、本当に枠にとられない発想でなさっているというところが本当に素晴らしくて、NPO だからこそっていうのを体現してらっしゃるなと思います。ですので、NPO に光が当たるっていうのは当

然なんですけれども。本当に深刻なニーズを受けとめて、創意工夫でやってくださっている、そういう取り組みをする人が増えれば、そこを制度にしていくルートもやっぱり作っていくべきだろうなと思うんですよね。日本の場合は、住まい保障政策がないです。皆無に等しいぐらいだと私は思っていますので、これは一から作らなくちゃいけない。新たな発想で作らなくちゃいけないと思っています。ですので、こういう取り組みをしている人がいるんだから、そこを支えれば制度になるんじゃないかということも言えるわけです。そんなことも、自治体レベルの政策担当の方々も含め、一緒に考えていけるといいのではないかと考えています。

**濱田：**

そうですね。やっぱりそれぞれできること、向いてることって違うと思うし、荒井さんがおっしゃるように、何でも NPO が現場で頑張ればいいじゃないかっていうのもちょっと違うと思います。荒井さんのサンカクシャさんの取り組み、私もさっき話を聞いて、あとホームページ拝見したりすると、なかなかこういうのは思いつかないなっていうのがすごくあって、やっぱり面白いことに興味、目が向くっていうのは仕方ないと思うんですが、面白くないことにも目を向けないといけないのかなっていうのも思ったりして。国政府、地方自治体、NPO 非営利組織、民間企業でできること、向いてることが異なるなっていうのをちょっと整理してみました。やっぱり NPO とか非営利とか民間の方がすぐ動けるし、それこそ、住むところ、寝る場所がないっていう人に対応する意味では、機動力がすごくあるし、フットワーク軽く会いに行けるし、「じゃあうちのシェアハウスおいでよ」ってすぐ言える。けど、やっぱり一部の人にしか届かない。そうすると、たまたま荒井さんが深夜につぶやいたツイートを見ることができた人は、そこで荒井さんのシェアハウスにたどり着くことができるけど、そうじゃない人はさまよい続けられないっていう感じになってしまう。

反対に、国とか自治体とかがっていうのは動くのにやっぱり時間がかかる。でも、小田川さんがされていることですが、制度化に向けた後押しをする、制度化することで多くの人をカバーできるように、誰でもいつでも使える仕組みを作るっていう意味で、やっぱり国とか地方自治体とかがきちんと制度化するっていうのを組み合わせる必要があるっていうのは、改めてお話を聞いてて思いました。

でも、この「NPO に光が当たりすぎる問題」っていうのは、どうしたら解決に向かえるんでしょう、あるいはもう少し国とか行政とか動いてよっていうのはどうしたらいいでしょうね。

**荒井：**

ちょっと聞いてみたいんですけど、さっき提言とかしてたじゃないですか。あれの反応

とかすごい気になるんですけど、「NPOに光が当たりすぎ問題」の一つってやっぱある種、リスクとしてやってみることって、今、日本全体として変わっていかないといけないとか、やり方変えていかなきゃいけないとかっていう段階なんじゃないかなと思ったときに、NPOだとそれやりやすいんですけど、もうちょっと国とか自治体も、そうやってリスク取ってチャレンジしていったりしていくと、そちらにも光は当たるんじゃないかなって思っていて。やっぱ変わらなきゃいけないし、変えなきゃいけないけど、誰がその担い手になるのかってときに民間だけが手を挙げている状態は良くないんだろうなと思うんですけど、ああいう提言があったときの国の反応っていうのはどうなんですか。

小田川：

私達が提言している内容は、社会的養護の自立支援を充実してもらいたいというものですね。これは、実は厚労省でも、今ホット 이슈として捉えていただいているのかなと思います。つまり、子ども支援政策が、保育園施策、子育て支援からいろいろ充実してきている中、今遅れているのは社会的養護で、特に、その後の若者支援、自立支援のところがとりわけ遅れているという課題意識を厚生労働省の担当課でも思ってくださっているようで、一緒に考えましょうみたいな形で受け止めてくださっているなという印象です。

あと、「NPOに光が当たりすぎ問題」で、自治体もやればいいのにとおっしゃいました。これは、子どもの貧困政策でも、やっぱり市長さんとかがものすごくやる気のある方で、「これをやれば絶対にうちの市は変わる」みたいなことを信念として持ってらっしゃる地域は、モデル的な施策をオリジナルで出してやってらっしゃって、素晴らしいなということでクローズアップされたりします。けれども、自治体、とりわけ基礎自治体はそう財源はないので、独自でというのはとても難しい部分があって、お金を出すのであれば、民間でうまくやってらっしゃる取り組みをよく学んで、それを制度化していくことを考えたいということは、自治体の担当者とか議員の方々から伺うところですね。

それから、今私達がサンカクシャさんをサポートさせていただいているのは、休眠預金を活用した助成金なんですね。私達ユニバーサル志縁センターが、資金分配団体として助成をまとめていただいて、社会的養護の若者支援してくださっている現場の皆さんにまた助成をするという、ということをやっているわけなんです。この休眠預金事業というのは、社会課題の解決のために取り組む事業に助成し、制度化をしていくことを目指しています。ですので、行き当たりばったりの事業では駄目なんですね、しっかりと課題に対して、何をどういう変化を目指すのか、そのために何をするのか、それがロジックとしてきちっと理路整然と説明できるかみたいところ、また、評価がちゃんとできて、やれば変わりますということが示せるのであれば、制度化できますよねっていうふうにもっていきたいわけなんです。ですので、民間のNPOを応援して、良い仕組みを制度化するために政策提言もしましょうというのもセットになっている助成事業なんですよ。ですので、民間のNPOさ

んに光が当たり過ぎというのも、そういう意味では、必然的なことなのかなとも思います。

**荒井：**

民間ってちっちゃいから、頑張っているところを見てもらいやすいですけど、行政とか国って、逆に駄目なところばかり言われているじゃないですか。だから酷だになって、今の話聞いて。これだけ色々やっているじゃん、みたいなところを、もうちょっとみんなが褒めてもいいかなと思って。うまくいくとスルーされて、また違うところを怒られてってなると、自分たちだったらすごいしんどいし、やる気なくなると思うので。国がやる気を出るように、褒める時には褒めていいんじゃないかって、ちょっと思いますね。

**濱田：**

確かに駄目出しばかりされたらやる気なくなるなっていうのは、すごくわかる場所です。

さっきの助成金の話で、もうちょっとお聞きしたかったんですけど、助成金1年しかもらえないってことを荒井さんがおっしゃってて、これは私が別でちょっと関わってる学習支援とか、地域若者サポートステーションで若者の自立支援やっているような団体の方と話しても出てくる話で、やっぱり助成金1年しかもらえないから、常に助成金の申請をしている、常に申請書を書いているって。もうそれが仕事なんじゃないのかってぐらいに、書類を書きまくっているって話を常に聞くんですけど、1年しか助成金が出せないっていうのは何か理由があるんですか。もうちょっと長期間の助成金を作るっていうのは難しいんでしょうか。

**荒井：**

いや、実現可能性とかじゃないんですかね、やっぱり。1年後にうまくいく活動とうまくいかない活動って結構分かれるじゃないですか。助成したけどうまくいかない活動もいっぱいあると思うんですよ。なのに最初から3年継続するっていうのは…。3年継続だけど毎年審査入るよみたいなのはありますし、複数年助成はちょっとずつ増えてきているんじゃないかなって思うので、休眠で3年継続助成ができてくるといいなあとは思いますがね。助成金が決まるのって、事業実施1ヶ月前とかが多いんですよ。で、自分たちが、例えばシェアハウス二拠点出しますみたいなのを書いてたとして、1ヶ月後に1拠点目なんかできるわけがないじゃないですか。決まってから急いで動かなきゃいけなくて、当然人もいないので人も採用しなきゃいけなくてってなると、どうしても3ヶ月ぐらい遅れが発生するんですよ。3ヶ月で立ち上げて、そこから一気に3ヶ月ぐらい頑張るわけじゃないですか、やっとなんかできて半年なんです。半年ぐらい経つと、「終わった後どうするの？」みたいな。始まったばかりなのに。これが1年の助成金の実態で、大変なわけで。

なので、今既にやっている活動とか、確実性が高いものにお金がつきやすいみたいなのは、ちょっとバグだなと思って。NPOとしてはどんどん新しい挑戦した方がいいのに、やっぱその現実可能性とか、そういうところを見ると、出す側も躊躇するのはよくわかるんですけど。本当はもっと体力のあるNPOがいっぱい新しいことをしたらいいんじゃないかなって思うんですけど。私達もそうなりたいなと思います。休眠で3年ってできないんですか。

**小田川：**

3年枠っていうのもあるんですね。今回私達もチャレンジをしているんですけども、3年ですと、やっぱり資金が大きくなりますね。それで、自己資金を用意してくださいっていうのがくっついてくるんですね。この自己資金として資金分配団体も実行団体も総事業費の2割を用意しようとなっているので、ハードル高いなと思いますね。

**濱田：**

どうでしょう荒井さん、2割。

**荒井：**

自分だったら「はい」って言って取りますよね、後で事務局に怒られるんだと思いますけど。資金分配団体の2割ってめっちゃでかいですよ。

**小田川：**

大変です。ですので、必要なところはどんどんやっぱり制度化をして、ちゃんと安定的な仕組みにしていってもらえるように、そっちにも努力を傾けていきたいなあと考えています。私は資金集めは得意ではないので、政策提言の方の担当みたいな感じで分担をさせてもらっているんですけども。こういう福祉の領域の政策っていうのは、基礎自治体が、お金を全部出す体力がどこでもあるかっていうとそうではないですね。ですので、まずは国で制度を作ってもらうところがとても大事だなと思っています。ただ、国が全部お金出しますっていうのは滅多にないですね。国が半分、自治体が半分、その自治体の部分が、都道府県が4分の1、基礎自治体が4分の1とかですね。それは制度によって、事業によって、その割合は様々なんですけども。そうすると、「国は制度を作りました、けど、うちの自治体は、そこに予算を付ける決定をしませんでした」となると、その地域では、その制度は存在しないことになるんですね。そういうことで、全国の間で、地域間格差が生まれていて、社会的養護の領域は結構それが今問題だっていうふうに言っています。社会的養護の若者のためのアフターケア事業に各自治体でちゃんと予算を付けてもらえて、どこに住んでいる若者もちゃんと支援に繋がれるようになっていくことをずっとお話してい

て、今回、制度化することを、法律に書いていただいたので、そこは是正していくのかなあというふうに思うんですけども。いずれにしても、やっぱり現場の皆さんが、それぞれの自治体で、こういうニーズがあるから自治体としても政策にちゃんとしてくださいねっていうふうに言っていくということはとても大事なことだと思っています。

**濱田：**

そうすると、やっぱり声を上げるというか、「察して」って待ってちゃ駄目だっていうことなのかなって思うんですが。

**荒井：**

声をあげたいと思うんですけど、何したら、どうしたらいいですか。

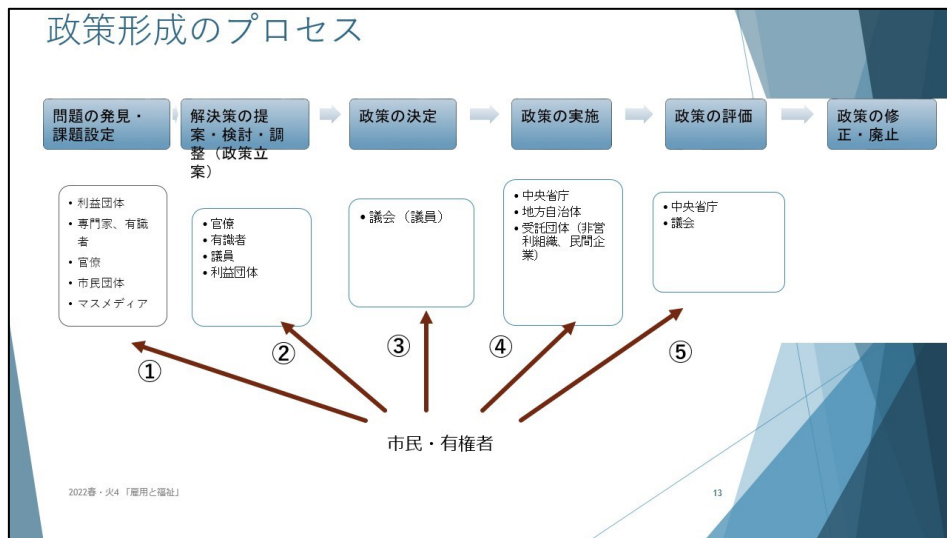
**小田川：**

それはいろんなやり方あるんじゃないかなと思うんです。この「声を上げる」っていうのは、一人で声を上げるのと、大勢であげるのとどっちが声が大きくなるかっていうことも考える必要があって、やっぱり一団体でっていうよりかは、いくつかの団体でとか、団体ベースだけじゃなくて市民も集まってとか、多くの人が意見を話せる場を作っていく、一緒に声を大きくするっていう、そういう流れも大事かなと思いますので、座談会を企画するとか、そこに議員さんに来てもらうみたいなこともありかなと思いますし、座談会で出た意見を取りまとめて文書にして、政策提言にするっていうのもありかなというふうに思います。

**濱田：**

そうですね、やっぱり一人で声を上げるってすごい難しいですし、一人で声上げてみたところでつぶされちゃったりしたら、「もう立ち直れない」みたいな気持ちになると思う。やっぱ仲間を作っていく、そういう意味で、ネットワーキングっていう、小田川さんの「首都圏サポートネットワーク」を作るっていうのは非常に重要なことだなって改めて思います。今の「声を上げる」の話で、ついでに政策がどう作られていくのか、プロセスみたいなものをまとめたものを用意してみたんですが、小田川さんのされている活動というか、提言っていうのは、そうすると②あたり（資料15）になるっていう感じですかね。

資料 15 (濱田作成)



小田川：

そうですね。まさに②のところだと思います。①のところも入っているかなと思います。つまり、日頃からお話を伺ったりとか、アンケート調査で様子を聞かせてもらったりっていうのは、課題の発見の部分だと思いますので。あと、「こういう課題あります」みたいなのをシンポジウムを企画して発信するっていうのも、こういう問題が見つかった、見えてきましたよっていうのは課題の設定になるのかなと思います。そういうのを受け止めて政策形成担当の方が考えてくればいいわけですからね。ですので、私達は①、②のところを頑張っているという感じでしょうか。

濱田：

荒井さんの的にはこの中、①ですかね。

荒井：

どう考えても①かな。とはいえ、その制度でカバーできない領域もあるにはあると思うんです。例えば、家族を頼れない若者たちが地域にはたくさんいて、私達やボランティアの人たちとかがほとんど家族、親戚ぐらいな感じになってたりするんですよ。こういうのってやっぱ制度とかではできない、地域の活動だなと思っていて、そういうのも大事だっことを結構訴えていたり、要は、普通の市民とか、普通の企業の人たちに話して巻き込んでいく、これは、この制度を作るプロセスとは別に、市民のネットワーク作るプロセスってたぶん資料 15 の左側にある気がしてて。それをうちは両方やっていきたいなっていうのはあるかなってすごい思いました。



**濱田：**

確かにそうですね。そういう分け方はできるなと思います。今チャットの方に、一つ質問が来ていて、荒井さんだけじゃなくて全員答えられるかなっていう気もしますが、荒井さんが話されていた、「『ユーチューバーであればどういう人かわかるけど、役所だとどういう人かわからない。だから怖いとか信頼できない』っていうのが非常に個人的に衝撃でした。改めて伺いたいのですが、広義の支援に携わる人っていうのは一体何を大事にしたらいいのでしょうか」っていうような質問をいただいているんですが、その辺どうでしょうか。

**荒井：**

私達って行政ではない民間の立場なので、私達が大事にしていることは何かってだけの話をすると、やっぱり若者たちにいかに安心してもらい、信頼してもらうことができるかなってところで。「支援者」ってアイデンティティをどれだけ脱げるかっていう。いや、だからもう普通に一人の友達として関わってるみたいな感じを、いかに再現できるかっていうのにすごい工夫をしています。場の作り方も、関わり方も、立ち振る舞いも、言動も、友達になりきるみたいなのところかなり振り切っています。それって行政とか、専門職の人が周りで支えてくれているからできるんですけど。

とにかく仲良くなれないと支援が何も始まらないので、仲良くなることに全振りしてるっていうことが、私達の団体のスタンス。いかに信頼してもらい、仲良くなれるか。若者からの相談を受けたいなら、仲良くなって信頼されるってプロセスを踏まなきゃいけないっていうところがあるので、それをやっています。質問していただいた方がどういう立場の方かわからないですけど、行政の人たちだったらどうしたらいいんですかね。

**濱田：**

そうですね、確かに仲良くなるっていう、そのステップが挟まれないと信頼してもらえないし、「相談窓口作りましたよ、相談しに来てください、待ってます」じゃやっぱり難しいということですかね。

**荒井：**

困り事が明確だったらいいんですけど、若者たちって何に困ってるかわかんなかったり、本当に困ってるときって、何か困りごとがあっても明確にわからなかったりするんで、この人だったら話してもいいかなとか、この人に話してみたいなって思ってもらえるような関係作りっていうものを、結構ちゃんとやらないといけないなと思っていて。なので、「窓口作った、相談してください」っていうのは結構ムリゲーに近いなっていうのは、若者の目線からはすごい感じるんです。法的な窓口であっても、そのハードルをどれだけ下げら

れるかっていう努力は、たぶんできる気もしますし、民間と連携しててもいいと思いますし。ゲームやるといいと思いますよ、若者の感覚がわかるから。

**濱田：**

ゲームで仲良くなっていく、信頼関係。

**荒井：**

Twitterとかやってみて、若者が日々どんな情報に触れてるかとか。YouTubeとかずっと見てたらしいと思うんですよ。本当に「くだらねえな」って思うんですけど、そういうの、若者はずっと触れているので、そういう勉強からでいいんじゃないかなと思ってて。

私 2800 時間ぐらいゲームやりましたけど、1000 時間を超えてきてやっと彼らと同じアイデンティティまとえたなって感覚があるんですけど、そこまでいかななくてもいいですけど、触れてみる、やってみるとかはすごい大事な気がしてて。理解しにいくっていうのが大事になんじゃないかなって、一応。わかんないですけど。

**濱田：**

やっぱりそうすると、そういうのはなかなか行政では難しいなっていうのは、改めて思ってしまったりもするところですが。

今日一応「困窮する若者と住まい」の話で、いろいろ、困窮する若者にどう繋がっていくのかとか、それをどう制度化していくのかみたいな話をかなりしてきましたが、そもそもその住居支援のところが経済的な支援の話と違って、どうでしょうね、小田川さんとかそういう活動をされてきて、ありますか。

**小田川：**

そうですね。先ほどまでは、シェアハウスでの伴走支援がテーマになってましたが、やっぱりその次、シェアハウス出た後どうするのって言ったときにも、まさに今おっしゃった、経済的側面での住まい支援が制度としてないと、社会生活のベースを固めることができませんので、そこがとっても重要だなと思っています。これは、支援団体を介しての支援というよりかは、個人に対する給付という形での住宅手当、あるいは家賃補助と言われるものですが、そういったものがきちっと制度化されて、使いやすく用意されているということがとても大事なのではないかなと思います。

いま日本では、きわめて低所得になったときには生活保護を受けて住宅扶助という家賃補助が使えるんですね。その手前の制度として、住居確保給付金というのができて、短期間ですけれども給付を受けられる制度がありますけれども、そういう短期のものではなくて、もう少し長期のもので、低所得である間は給付します、というふうなものが用意され

ていく必要がどうしてもあるのではないかと思います。若者だけではなく、もっと年齢の上の方々でも、仕事が不安定になりがちであるという社会状況において、住宅手当という制度があるってとても大事なことだと思ってます。

**荒井：**

平時で生活保護のもうちょっとライトな感じですか。

**小田川：**

そうです。

**荒井：**

若者の生活保護を受けたくない気持ちって根強いなと思っていて、とにかく「やだ、自力で頑張りたい」って言うんですけど、もうちょっとライトなものがあってもいいんじゃないのかなっていうのは思いますし、「お金もらえてラッキー」ぐらいの感じであってもいいんじゃないかな。そうすると働かなくなったりすんのかな。生活保護の手前の何か欲しいなっていうのをすごい感じますね。

**小田川：**

そうですね。今、家賃補助とか、住宅手当の政策をどうデザインするかっていった議論の中で、生活保護の手前のところで住宅扶助だけ先に出すっていうのもありなのではないかというふうなアイデアもあるんですけども、諸外国、例えばフランスなんかを見ると、家族手当の中に住宅手当が入っています。子どもがいない人でも住宅手当ってもらって当然ぐらいの感じであります。これはアパート、賃貸住宅を借りている人だけではなくて、持ち家の人に対しても住宅手当っていうのがそれなりにつくので不公平感がないですよ。ですので、そういう意味で、フランスでは、住宅保障っていうのは社会保障の一つの柱としてしっかり位置づけられていますし、あって当然なものだとみんな思っている、そういう社会です。日本はそこはなぜか自己責任なので、うやむやにされているところがあるっての困窮の広がりではないかなと思ってます。この先は、住宅手当なんかならないかなと思っっています。

**濱田：**

緊急保護的な形でシェアハウスに繋がって、そこから一生シェアハウスで暮らすのも難しいので、次、じゃあどうするかっていうときに、やっぱりそういう経済的な支援が必要になってくるっていうことに。ステップを踏んで支援が必要で、そのステップを踏めるように、きちんと制度として保障していくっていうのがやっぱり必要なのかなっていうのを

改めてお話聞いてて思います。

そろそろ時間になってしまいそうなところなんですけど、最後までフロアの皆さん、質問があったらお受けしたいと思いますがいかがでしょうか。

**質問者 A :**

フランスとかイギリスといった、他国よりもウエイトが目に見えて低いことがわかると思うんですけども、社会住宅や住宅手当っていった、単純なこの二点を拡充するにあたって、日本でそれが今拡充できてない、ネックになっていることってというのは何なのか、すごい気になったんですけども。もしよろしければご意見を聞きたいと思います。

**小田川 :**

私はそうですね、思ってるのは、やっぱり日本では、先ほど濱田さんから説明があった「住宅すごろく」のように、自分の力で住宅をステップアップしていく、住宅は自分で購入するっていうのが当然だっていうふうに、思い込まされている。そういう考え方が社会に浸透しているっていうことが、まず大前提としてあるのではないかなと思います。住宅は個人で借りるもの、個人の所有物だから、そこには公的な資金、保障っていうのは入り込む余地があまりない、そういう考え方が残念ながら今に至ってあるが故に、充実していかないのではないかなというふうに思ってます。ですので、「そういうことを言っている社会状況ではもうありませんよ」、「もうこれだけ困窮が広がっていて、社会保障として対処すべき課題になっています」という、その辺りの共通理解が広まれば、変わっていく可能性があるのではないかなと期待しています。

**荒井 :**

これだけ社会が変わっていった中で、やっぱり一個一個の制度の微修正っていうのももちろん大事だと思うんですけども、制度の根本の哲学の見直しみたいなのがってされてたりするんですか。...されてない。その辺からなのかな。

**小田川 :**

そういうのって世論だと思うんですよね。政策を動かすような価値観が、世論として広まっていくっていうのがとても大事なんじゃないかと思います。

**濱田 :**

やっぱり、問題をまず可視化する、可視化した上で話題にして、それに対して働きかけを続けていくっていう。一晩で全部が変わるっていうことはなかなか何の制度にしてもないので、制度にするっていうのはやっぱ時間がかかりますが、その時間がかかっている間で

も人は生きていて、今日食べるもの、住む、寝る場所が必要なので、そこを荒井さんたちがサポートしてるっていうような感じの、両方を組み合わせてちょっとずつ、時間はかかるんですがやっていくしかない。例えばそういう活動している人を選挙の時に公約とかをチェックして投票するとか、公約のなかに対策入れてもらうためにロビー活動するみたいなこともしながら、少しずつ時間をかけて変えていかないといけないところなんで。根本を変えるって、やっぱそういうところを、地道な活動をしていかないといけないんじゃないかなって。

**質問者 A :**

ありがとうございます。制度とか、そういう話以前に、まず世論を変えていかないといけないっていうお話を先ほど小田川さんがしてくださったと思うんですけども、そこがすごい住宅問題、住まい支援のとても重大なことなんだなっていうことが再確認できる言葉だと思いました。

**小田川 :**

ご質問ありがとうございます。あと、お話したいなと思うのはですね、低所得者が住める住宅を増やすということが確実に必要だということですね。住宅手当があったとしても、その金額で借りれる住宅がなければ、やっぱり住めないものは住めないわけですから、困窮者が住めるような住宅が必要だと思っています。そういう民間住宅を増やす。公営住宅が増えないのであれば、低家賃で提供するその他の住宅を増やす。そこには住宅手当もくっつけてっていう工夫が必要ですけども、そこへの誘導ですね、インセンティブをどうつけていくのかといったところも政策の課題なのではないかと思っています。人々の考え方の変革っていうのも大事ですけども、それとは別に、政策としては、そういういろんな工夫がなされていくべきだろうと思っています。待ち遠しいです。

**質問者 B :**

今日の講演、どの話もすごく面白く、勉強させていただいていたんですけど、様々なことをこれから政策決定の過程で政府に求めていくことになると思うんですけど、その政府にも財源とかの限度がある中で、企業との連携っていうのも一つ大事な部分なのかなと思っていて、今日お話を聞いている中で、荒井さんのサンカクシャさんの話に企業っていうワードが何回か出されていて、そういうところに関して何かお考えがあったらもう少し詳しくお聞かせ願いたいなと思いました。

**荒井：**

そうですね。企業には二つあって、地元・地域の企業と、大企業みたいな、ざっくり分けると。地元・地域の企業は、割と地域のために何かしたいって昔から思っていたりして、なおかつ SDGs の影響で何かしなきゃいけないって思っていて、営業に行くためっちゃ連携がやりやすくなったんです。これは現場レベルでの話で、昔だと、子どもの貧困に対して「そんな子いるのか」とか、「海外の方が困ってんじゃない」だとか言われていたんですけど、今は何の話をして「いいね」、「何ができるか」って話から始まるので、やっぱ時代は変わったなってすごく感じます。

そういう話はそれでいいんですけど。もう少し大企業とかがお金を投じる、民間の再分配みたいな感じができたらいいのかなとちょっと思っています。これもすごい難しいんですけど。グローバルとかだと、IT 人材が足りないから、若者の就労支援とかすごい力を入れたりするんですよ。それでも究極はやっぱり企業のためだったりして。私達も外資の企業と連携すると、正社員の就職率とかをすごい追及されたりすることがあったりとか、「自立させてくれ」という、圧みたいなのが結構かかってくるので、もうちょっと現実を知ってもらいたいなっていうのと、そんな自立しやすい子ばかりだけじゃないなっていうのと。

やっぱり、（企業の人たちは）ある種、競争を勝ち上がってきた人たちなんで、いい高校入って、いい大学入って、いい会社入って、たくさん納税するみたいなルートに当てはまらない子たちがいるってことをちゃんとわかっていたいただきたいです。企業側の人たちの、ある種視野の狭さみたいなのが結構大きいなと思っています。なので、もっとやっぱ現実を知ってもらい必要があるんじゃないのかなって思っています。みんなエリートなんで周りもエリートなんです。だから、「みんな就活して当然でしょう」みたいな感じなんですけど。家で引きこもってゲームばかりして YouTube 見てる若者を見ると引くみたいな。そういう世界の人たちもたくさんいるので、やっぱりいろんな人のそういう価値観と現実認識が変わってほしいなっていうのはあって、そこの橋渡し役になればいいと思います。最近、意欲的な人が私財を使ったりとか、企業の役員とかもすごい大きい額を寄付してくれたりとか、変わってきているなっていう感覚もあります。とにかく現場をいろんな人が知っていくべきじゃないのかなと思うので、そういうところへの発信もちゃんとやっていきたいっていうのはすごい思っています。

**濱田：**

ありがとうございます。学生の方々からご質問をいただけて、とっても良かったと思います。

今日のトークイベントとかパネルディスカッションをきっかけにして、さっき「話題にしていく」とか、「話を周りの人として、問題を可視化していくのがまず一歩目として大

事だ」っていうことだったんですが、今日のイベントをきっかけに皆さんも周りの皆さんとこういうお話してみたりとか、仕事の話だけじゃなくてですね、住まいの話とかもしてもらえたらいいなというふうに思ってます。なので、これでおしまいではなくて、今日が入り口というか、きっかけになって、またこの問題について考えたり、行動する人が増えてたらいいなというふうに個人的には思っています。どうでしょう、最後に何かありますでしょうか、お二人から。

**小田川：**

私は今、日本で貧困が広がっているなかですね、仕事が不安定だっという人がとても多いし、それがもうある意味普通、みたいな地域もあるわけですので、「仕事が不安定でも、住まいは安定」という状態をいかにつくり出すかが課題だと思っています。仕事がなくとも、不安定でも、やっぱり生きていくわけで、生きていくには住まいは絶対に安定的に必要なわけですから、「仕事は不安定でも、住まいは安定」という状態をつくり出す制度、政策をしっかりと考えていきたいな思っています。そして、これは多くの皆さんと課題認識を共有して、声を大きくしていくことで実現に近づいていくんだらうと思いますので、今日は皆さんとこのテーマでいろいろと一緒に考える時間を持てたこと、本当にありがたいなと思っています。今日はありがとうございました。

**荒井：**

感想みたいな感じですけど、私、「ちゃんと声を上げて、政策とかに何かしらの影響を与えてみたい」って思ったのは、結構このイベントに呼ばれて、事前打ち合わせして、というのが大きいなと思っていて。割と「何したらいいかな」と考えて、今日ですごい大きなヒントをいただいたなって気がするので、これからちょっと私達も、多分ユニバーサル志縁センターの方々と一緒に声を上げて、この住まいの取り組みがどう広がっていくのかっていうのを、ぜひ皆さんに見届けてもらいたいなと思います。今日の話聞いて、私達は私達なりに頑張りますけど、一人ひとり、多分、何か行動していくっていうのがすごく必要な気がするので、今日のこの場に参加した人たちは、ちょっとでもいいので、何か行動に移してもらえたら嬉しいです。やっぱり一人ひとりが変わっていったり、世論を作っていくっていい限り、誰かがやってくれる問題ではないってことはすごくよくわかったので。私達も頑張るんですけど、今日聞いちゃった人たちは、何でもいいと思うので、何か形にできたらいいんじゃないかなと思っていますので、ぜひ一緒にやれたらいいかなと思います。ありがとうございました。

**濱田：**

ありがとうございました。知っちゃった皆さん、ぜひこれから一緒に何かしていきましょう。ということで、このあたりで今日のイベント「困窮する若者と住まい—政策形成に市民はどう参加できるのか—」をおしまいにしたいと思います。オンラインで参加の皆さん、遅くまでありがとうございました。会場の皆さんもありがとうございました。最後に、とても面白いお話聞かせてくださった荒井さん、小田川さんに大きな拍手をして終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

**小田川：**

濱田さんも素晴らしいファシリテートありがとうございました。

荒井 佑介（あらい ゆうすけ）（NPO 法人サンカクシャ）

小田川 華子（おだがわ はなこ）

（グローバル・コンサーン研究所・公益社団法人ユニバーサル志縁センター）

濱田 江里子（はまだ えりこ）

（グローバル・コンサーン研究所・立教大学コミュニティ福祉学部）